

鹿児島医セン

連携室だより

2006.11 No. 8

鹿児島医療センター（循環器・がん専門施設）

創立105周年、開設25周年記念式典、 記念祝賀会を開催しました。

当院は明治34年（1901年）、鹿児島陸軍衛戍（えいじゅ）病院として創設され、創立105周年、昭和56年、鹿児島大学医学部附属病院跡地に国立南九州中央病院として開院され、今年で25周年を迎えました。更に、平成18年4月、鹿児島医療センターへ病院名変更、5年前より行なってきました増・改築工事もこの8月、終了しました。そのお披露目も兼ねて、10月14日（土）城山観光ホテルで記念式典・記念祝賀会を行いました。

記念式典では院長挨拶に引き続き、米盛學県医師会長、吉田浩巳鹿児島大学大学院医歯学研究科長、吉田紀子県保健福祉部長、独法本部樋口正昇理事に御祝辞を戴きました。引き続き行われた記念祝賀会では保岡興治、尾辻秀久、川内博史の三代議員らにもご臨席頂き、お祝いのお言葉を戴きました。

記念祝賀会には鹿児島大学大学院医歯学総合研究科の愛甲、鄭、中條、有馬、柴鶴、熊本らの各教授、神崎名誉教授、上津原鹿児島市立病院長ら公的病院院長、連携先の開業医の先生方、西村、鹿島名誉院長、歴代の事務部長、看護部長、職員ら330名のご出席を頂きました。特に、連携先の先生方にはお忙しい中、多数のご出席を頂き、感謝をたえません。祝賀会ではソプラノ歌手大園麻美子さ



んのお祝い歌、霧島九面太鼓 和泰の演奏などが行われ、賑々しく、楽しいひと時を過ごさせて頂きました。大変有難うございました。

お祝いのお言葉の中で我々が地域医療の中で循環器・脳卒中・がんの専門病院として、役割を果たしていこうとしている事、そのために鹿児島医療センターと病院名変更をした事も肯定的に受け取られているように感じました。今後とも、当院が地域医療の中で本来果たすべき役割は何かを熟慮し、その任を果たしていきたいとの思いを強くしました。

「派手な会でしたね」とのご意見もありますが、我々の病院が世間でどのように見られているのかを職員に知ってもらうにはいい機会であったと受

お問い合わせ先

独立行政法人
国立病院機構

鹿児島医療センター（循環器・がん専門施設）

〒892-0853 鹿児島市城山町8番1号
TEL 099 (223) 1151 FAX 099 (226) 9246
<http://www.kagomc.jp>
脳卒中ホットライン ▶▶ 090-3327-5765

〈地域医療連携室〉 濱田、岩下、石井、中島、田添、善福
直通電話 ▶▶ 099-223-4425
フリーダイヤル専用FAX ▶▶ 0120-334-476
※休日・時間外は当直者で対応します。



け止めています。我々は院内で生活していますと外から病院を見る視点を失いがちになります。戦国時代、武将が城を攻める時、どこに弱点が有りそうか、外から眺めて考えたと思います。この病院が生き残り、役割を果たしていくために何をなすべきか、外から眺め、外の人たちの評価を聞く

ことが大事だと思います。そうした機会になったのではと思っています。

これを機会に更に地域の医療に貢献できる病院に進化していきたいと思います。今後ともご指導戴きますようお願い申し上げます。

病院長 中村 一彦



記念式典、祝賀会
風景



新new人 紹face介

第二循環器科医長



かしま かつろう
鹿島 克郎

大学病院を離れ、鹿児島医療センターで循環器診療をじっくりやりたいと思い赴任してまいりました。冠動脈インター

ベンションが専門領域ですが、循環器疾患の治療だけでなく、その発症原因や長期的な予後調査まで関わった診療が理想です。特に急性心筋梗塞の発症を予知することが生涯の夢です。趣味はマラソンでシューズに凝っています。精一杯努力する所存ですので、何卒、宜しくお願い致します。

昭和63年熊本大学医学部卒業、同年鹿児島大学医学部第2内科入局、平成4～6年小倉記念病院循環器科国内留学、平成10～12年国立南九州中央病院（現鹿児島医療センター）、平成12～18年鹿児島大学医学部第2内科助手

第一循環器科医師



なかの ふみお
中野 文雄

平成3年に埼玉医科大学を卒業し、同年鹿児島大学第一内科へ入局致しました。

入局後は鹿児島大学、鹿児島市立病院で研修し、平成6年3月から平成7年4月まで当院第一循環器内科にレジデントとして勤務させて頂きました。

その後は鹿児島大学、岡山県倉敷市の倉敷中央病院循環器内科、天陽会中央病院で冠動脈インターベンション治療を中心に診療させて頂きました。この度平成18年10月1日より当院勤務を命ぜられました。約10年ぶりで懐かしさ半分、不安半分といった心境です。勤務体制に慣れるまで時間が掛かりますが宜しくお願い申し上げます。

脳血管内科レジデント



はぎはら たかあき
萩原 隆朗

平成16年に岩手医科大学を卒業し、同年に鹿児島市立病院初期臨床研修医登録、今年3月に終了後、鹿児島大学神経病学講座 神経内科・老年病学（旧第3内科）に入局しました。

今年の9月まで鹿児島大学病院で勤務後、10月から脳血管内科にレジデントとして赴任してまいりました。脳卒中の専門科で症例も多く、いろいろな経験が出来るかと楽しみにしています。経験も浅いためいろいろとご迷惑をかけることがあるかと思いますが、どうぞよろしく御願いたします。

外科レジデント



かわづ よしかず
川津 祥和

平成16年に鹿児島大学医学部を卒業後、同大学プログラムにて2年間の臨床初期研修を修了し、今年同大学第二外科に入局致しました。入局後は半年間、鹿児島市立病院にて麻酔科研修を行い、10月より当院に外科レジデントとして配属されました。外科医としての経験もほとんど無いままですが、第一線の病院で修練させて頂けることを大変嬉しく感じております。ご指導ご鞭撻の程、何卒宜しく御願申し上げます。

麻酔科レジデント



かわの まこと
川野 誠

医者になって11年目のレジデントです。正職員までの道のりは長いものです。非正規雇用労働者の増加、格差の拡大、といった社会の問題を身に持って感じています。このままでは負け組みになってしまうのではないかと、自らの将来に対する不安や悩みは尽きませんが、不安や悩みはあるがままた受け入れ、日々なすべきことをなしていこうと思います。

ご指導ご鞭撻のほどよろしく御願いたします。

心臓血管外科レジデント



きたその いわお
北園 巖

平成14年に山口大学を卒業し、鹿児島大学第二外科へ入局しました。平成18年10月から心臓血管外科レジデントとして勤務させて頂くことになりました。前病院までは消化器外科を中心として学んできました。循環器外科としてはまだまだ未熟で、ご迷惑をおかけすることもあると思いますが一生懸命頑張っておりますのでよろしく御願いたします。

職場紹介 シリーズ17 (栄養管理室)

朝、まだ薄暗い頃から、一定のリズムによって厨房は食事の準備にとりかかります。

三人の調理師により朝食およそ280食が素早い作業で作られ、配膳される頃には日勤の調理師5～6名と栄養士・事務がそれぞれの仕事につきます。

昨年5月に栄養管理室は仮設棟から元給食棟へ帰転しました。構造はできるだけ動線がスムーズな流れになるようなレイアウトで、防火設備、最新の機械機器が設置され、一層使いやすくなりました。空調設備はいつも一定の温度と湿度が保てる環境にあり、人や食品に快適さを与え、より安全に食事を提供できる給食室に様変わりしました。スタッフは総勢19人、基本的理念＝「患者様に適切な栄養管理・わかりやすい栄養相談」をかかげて頑張っているところです。

食事の種類は基本に30食ありますが、コメント食を加えると一食200種程になります。即ち患者様の3分の2の方が何らかのコメントを持っていることになり、個人対応の時代であり、細部への対応もできる限りおこなっています。

入院患者様全員にスクリーニングを行ない、低栄養の方を抽出し、栄養状態をサポートするNSTも、各スタッフがそれぞれ専門性を発揮しています。また、メタボリック症候群の方も各棟に見受けられ、私達も栄養管理、指導の必要性を痛切に感じています。

さて、栄養管理室が診療部へ仲間入りして、業務の場を各病棟、外来へ向けていくことが要求されるようになりました。臨床栄養面からも医療の一端を担い、診療支援、患者QOL向上を食事の面からサポートしなければなりません。患者様の栄養に関する情報や問題点を医師やそのスタッフから得て、管理栄養士は栄養摂取量の評価、食事の工夫、報告等を行っていますがまだまだ十分な力が及んでおりません。一つでも多くの症例検討会、勉強会、各種カンファレンス、回診



スタッフ

等への参加も果たせるよう努力している最中です。また、患者の栄養状態及び嗜好、残食などに関する調査、栄養アセスメント、栄養パラメーターとなるデータの収集も地道に行なっております。

指導においては集団指導(糖尿病)の稼働と個人指導、患者訪問などの業務が山積していますが、時間を何とか調整しながら2～3人で走り回っています。

当栄養管理室のスタッフの長所は、みんなが技術職という認識を持ち、要求ある時にその特技を提供できるということでしょう。たとえば『行事食』『タンポポ食』『お祝い膳』『松華堂膳』などありますが、毎日、誰かが何言わずとも、調理場の静かな一角でもくもくと『包丁の技』を託している姿が見受けられます。が、そーっと見守ることにしましょう。

そして、13時からミーティングです。今日のテーマは【食事の適正量、形態は?】【衛生管理】【患者様の意見は】【残食量は】と様々です。

常に学ぶ姿勢と覇気を持って。チーム医療...まづ足元から。みんなの知恵と技術を集めて患者さまに必要な食事を提供していきたいと思ひます。

栄養管理室長 福元耐子

調理例

